

特集

アートと暮す

ふらっと立ち寄った画廊でひとつの作品に出会った。古い辞書の上に中世の若い女性の肖像が描かれている油絵。その力強いまざしに心を奪われた。金額を聞いてみると、上等な靴一足分くらいの値段。あるいは呑み会を2回我慢すれば捻出できそうな金額だ。それでも悩んだが、結局、譲ってもらったことにした。

絵画を買ったのは初めての経験。著名な写真家のポスターを外し、その「女性」を置いた。このポスターもフレーム込みで1万円弱はしたが、若くて、まだあまり名の知られていない作家ならば、同じような値段で「本物」を手に入れることができる。どちらが良いか？ という問題ではないが、何であれ選択肢が広がるのは歓迎すべきことだ。

その「女性」が我が家に来てから、アートを見る眼が変わった。展覧会に行っても、自分が欲しいかどうか、

お気に入りの洋服と同じ感覚で

という視点で鑑賞する。素敵だけではない。下手だけど惹きつけられる。自分にとってどんな存在なのか。新鮮な印象を心に刻み、気に入ったら細部まで観察する。もちろん手に入る可能性は全くないのだが。自分なりの物差しがなんとなく出来ていくと、展覧会、ギャラリイ巡りが楽しくなっていく。

今回の特集では「アートと暮す」というテーマで、生活の中にアートを取り入れている人や、ギャラリイの紹介、そしてアーティストの生活についてのインタビューを行った。

投機目的や金持ちの道楽ではなく、お気に入りの洋服を買うような感覚で、ネームバリューに引っ張られずに「自分だけの作品」を手に入れる楽しさが伝わったら幸いです。佐賀の人々が、豊かな価値観を持つたら、きっと、この街は面白くなるのではないのでしょうか。



H・Mさん (40代・女性)

クリークの残る田園地帯。頭を垂れ出した青い稲穂の絨毯に浮かぶようにH・Mさんの自宅はある。絵本に出てくるような丸いドアが印象的な家だ。玄関を抜けると、存在感のある小屋組の吹き抜けリビング。大きな丸いアート作品が目飛び込んでくる。直径2mくらいか。「自宅の新築に合わせて地元の若手アーティスト・西山正晃さんに作ってもらいました」とH・Mさん。なんとオーダーメイドの作品だ。

「ギャラリイであった西山さんの個展を見て行って、ロボットの絵が描かれたポストカードを購入。夫に見せたら反応が良くて。吹き抜けの場所にアート作品が欲しいという話をずっとしていたので、思い切って頼みました」。西山さんは快諾。H・Mさんの自宅を訪ね、構想を膨らませた。そして、ある一つの提案をした。H・Mさんは「私の2人の娘と一緒に作品を作りたいと仰って。当時、6歳と3歳。考えもしなかったのでびっくりしましたが、すごく素敵なプランでした」。

リビングの床にビニールシートを敷き、西山さんが持ち込んだ大きな丸い「キャンパス」に白い絵の具で絵を描いていく。「娘たちは、それまで絵筆も持ったこともなかったの。最初はぐちゃぐちゃ線を引きっていました。西山さんがうまく指導してくれて、次第にノってきてウサギ

娘2人と協働 オーダーメイド作品



などを楽しく描いていました。どんな作品になるかドキドキしていましたが、うまく仕上げてもらいました。出来上がった作品は、錆びた鉄板のように加工されたキャンパスの上に、白い線が自由に遊ぶ。抽象的で楽しい雰囲気空間にもたらしめている。

自分の家に合わせたアートなんて高嶺の花。確かに高名な作家に頼めばそうだろう。だが、若くて意欲がある作家さんならば現実的な予算で、そのような夢を叶えてくれる。大きなオブジェの下で走り回る子どもたちを見ると、そういう選択もある種の豊かさなのだと感じた。

特集 —アートと暮す—

H・Tさん (50代・女性)

高い吹き抜けから、たっぷり太陽が降りそそぐリビング。ソファの後ろには、小品の油絵や版画が飾られている。H・Tさんのご自宅には味わい深い調度品とともに、センスの良い絵画が生活を彩っている。

H・Tさんは高校時代に美術部に所属。短大でグラフィックデザインを学び、デザイナーとして活躍した。結婚後、子育てが一段落した7、8年前から、再び絵画教室に通う。リビングの壁には、自身の作品も飾られている。メリハリの効いた色彩が楽しい作品だ。

最初に作品を購入したのも、再び絵筆を持ったころ。佐賀市内であったグループ展に出品されていた佐賀の作家・萩原俊樹さんの油絵に一目惚れした。「人物をピンクで描いていて、その色遣いが自分の趣味に合っていました。買うかどうか迷っていたんですが、同伴してくれた叔母が勧めてくれて。価格は数万円。出せない額じゃないので、思い切って手に入れました」と振り返る。

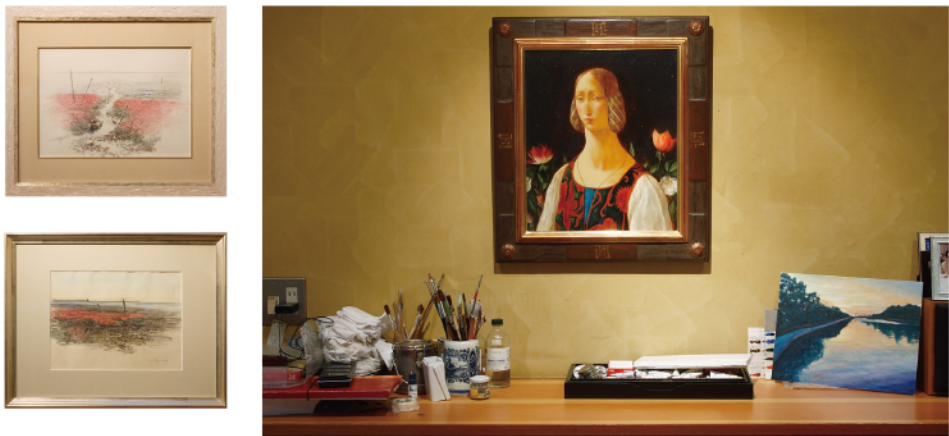
気に入った展覧会があれば九州内はもとより、中国地方の美術館まで足を伸ばす。最近では広島県の呉市立美術館に脇田和の作品を見に行っ

直感的に気に入った小品を中心に



た。ギャラリイやデパートでの企画展にも、足しげく通う。「自分が見て、素敵だと感じたものを直感で判断します。気に入ったものに出会うのが楽しみ。なかなか経験できません」と語るH・Tさん。有田町の菅原朋子さんの作品も2点購入している。「メゾチントという版画技法で作られた作品。タイトルが回文になっていたり、独特のセンスが好きです」。

購入する作品は0.1号の小品がメイン。「大きくてもサムホールサイズまでですね。小さいと、空間的に上品に見えるし、絵に比べて額の大きさがあるので寂しくもない。もちろん、お値段も手ごろです」と笑う。「ネームバリューや画歴にはまったくこだわりません。感覚的に気に入るかどうかが重要だと思います。気に入ったものは毎日見ても飽きません」。



T・Hさん (50代・男性)

玄関を開けると、たくさんの絵画が迎えてくれる。T・Hさんは「絵

の値段は確かに分かりにくい。でも、それが高価かどうかは価値観の問題。自分はアート収集には力を入れていないが、車には興味がない。以前は13年間、同じ車に乗り続けていました」と笑う。自宅には数十点の

アート作品がある。初めて作品を購入したのは7、8年前。たまたま買ったギャラリイにあった吉岡正人さんの絵に一目惚れした。当時、奥さんの影響で絵を描き始めたばかりだった。

リアリズム絵画が好き 所蔵作家と交流も

コレクションの中心は若手・中堅のリアリズム画家。「佐賀大学准教授の小木曾誠さんや、小尾修さん、そして大畑稔浩さんの作品が好きです」。精緻な筆跡で、写真と見まがうような人物や風景が描き出されている。初期の頃から購入しているのが作家との交流は深くなる。T・Hさんの案内で巡った佐賀の風景を描いた作品が、美術館に収蔵されていることも。地元の作家では日本画家の八谷真弓さんの作品もお気に入りという。好きな作家の評価が上がっていくことも、美術品収集の醍醐味のひとつだ。

自宅の設計も絵を飾ることが前提。リビングにはトップライトから自然光が入り、天井の曲面に反射し壁全体を優しく浮かび上がらせる。スポットライトもばっちり。写実的な絵画の持つ存在感を際立たせている。作品は季節ごとに展示替えるという。

T・Hさんは東京へ出張するときは、時間をやりくりして展覧会や画廊を回るといふ。「ふらっと展覧会に入って、良い絵に出会うこともある。画廊は見るのはタダ。戻込みせずにどんと出かけて欲しい。いろんな人に見てもらおうと、絵も喜ぶと思います」。

特集 —アートと暮す—

塚本 猪一郎 略歴

1956年 佐賀市生まれ
 1981年 シェル美術賞展入選
 1982年 佐賀大学特設美術科卒
 1985年 マドリード・コンプルテンセ大学留学
 1988年 リキテックスビエンナーレ受賞
 1993年 軽井沢ビエンナーレ入選
 1998年 谷川俊太郎氏とコラボレーション（松山市民会館）
 1999年 湯布院「西部ガス保養所」陶板壁画、モニュメント制作
 2000年 英展受賞。福岡KBCビル・モニュメント制作
 2001年 メリルリンチ社イメージ作品に採用される。
 2007年 パリ・IDEM（旧ムルロー工房）にてリトグラフ制作
 2009年 仁川学院50周年記念モニュメント制作（兵庫県西宮市）



ラーメン屋台 稼ぐ自信

塚本さんは1982年に佐賀大学特設美術科を卒業。就職することは考えなかった。選んだのはなんとラーメン屋台。「昼間は制作して、午後10時から佐大前で営業。深夜3時までしていましたね。縄張りがあるのを知らなくて怒られたり。一人なんとか暮らせるくらいは稼いでいました。その時の経験があるから、なんとかして食っていく自信ができました」と塚本さんが笑う。

大学在学中から毎年、個展を開いているが作品はほとんど売れなかったという。「当時、佐賀には抽象画の市民権は無いも同然でした。絵だけで食っている人も2人くらい。非常に厳しい時代でした」。

初めて売れた作品は絵画ではなくオブジェ。半円形の石膏に模様をつけたものを会場にたくさん並べた。買ってくれたのは先輩の洋画家・吉田西郷さん。「いいね、と気に入ってくださって。すごく嬉しかったですね」と振り返る。ただ、まだまだ創作だけで食っていくには程遠い状態だったという。

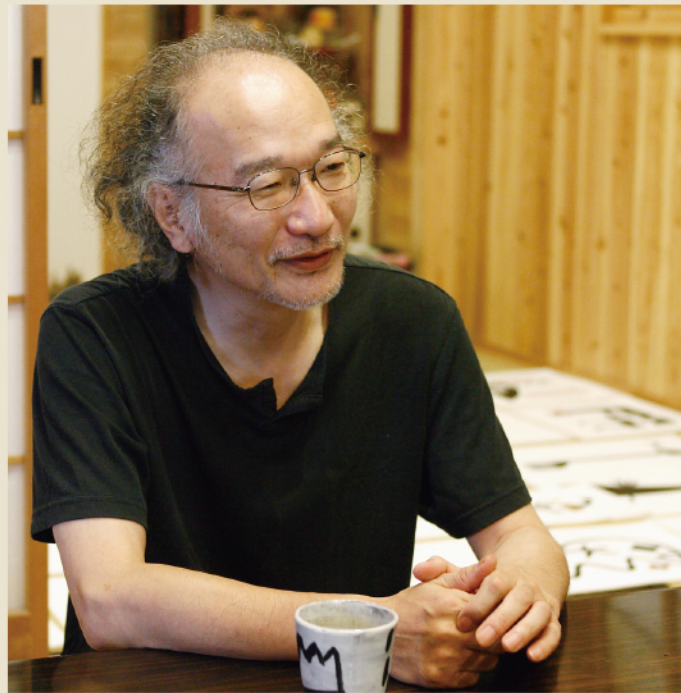
カレンダーを手掛かりに

そこで塚本さんは一計を案じる。26年前のことだ。「まずは家に飾ってもらおうにはどうしたら良いか考えました。それで浮かんできたのがカレンダーです」。塚本さんのカレンダーはシルクスクリーンの手刷り。つまり本物の版画4枚が5千円で手に入る。「一度飾ってしまっ

アーティストとして生活するには

塚本猪一郎さんに聞く

アーティストが創作活動だけで生計を立てるのは非常に難しい。佐賀を拠点に幅広い表現活動続ける塚本猪一郎さん(55)に、アートで食っていくために必要なことについて、体験談を聞いた。



お知らせ

塚本猪一郎個展
 11月22日から「ギャラリー久光」と「ギャラリーシルクロ」で。カレンダーも販売。
 塚本猪一郎カレンダー
 「喫茶するゝる」「ギャラリーシルクロ」
 「武蔵画廊」で10月初旬から発売予定。

内面を掘り下げないと伝わらない

「誰でも小さいときは絵を描くのが当たり前だったと思います。だんだん年齢を重ねるごとに、上手、下手の話になっていく。絵を描くという本能を忘れていくのではないかと感じています。せめて壁に人間の息吹がかかることで、本来の姿を取り戻すことができるのではないのでしょうか」と塚本さんは語る。生活の中にアートを置く。アートとともに日々をおくる。それがアーティストと購入者、両方の人生を豊かにしていく。「若い無名の作者のものであっても本物は心に届きます」。

今年もカレンダーの制作の時期が近づいてきた。「全て手刷りなので体力的に大変です。部数も減らして今年は400部。でも、楽しみにしている人がいらっしやるので頑張ります」と玄関に積まれた紙の束を見つめる。油絵から版画、鉄のオブジェ、そして焼き物へ。多彩な方法で自分の内面を表現し続ける塚本さん。その原点を忘れない姿勢がふれない表現活動を支える。

絵は人間の本能

「誰の言葉が心に残っているという。谷川さんは、読む人がそれぞれの人生に当てはめられるような言葉を探して詩を作る、と仰っていました。それは普遍なことかもしれないと思いました。コアな部分まで掘り下げた言葉は、他人の人生のどこかに届く。誰かに伝えるために、自分を掘り下げる。そのために最大限の努力を続ける。続けることが才能なのかもしれない」。

壁にかけてもらうことから考えた

「誰の言葉が心に残っているという。谷川さんは、読む人がそれぞれの人生に当てはめられるような言葉を探して詩を作る、と仰っていました。それは普遍なことかもしれないと思いました。コアな部分まで掘り下げた言葉は、他人の人生のどこかに届く。誰かに伝えるために、自分を掘り下げる。そのために最大限の努力を続ける。続けることが才能なのかもしれない」。

「誰でも小さいときは絵を描くのが当たり前だったと思います。だんだん年齢を重ねるごとに、上手、下手の話になっていく。絵を描くという本能を忘れていくのではないかと感じています。せめて壁に人間の息吹がかかることで、本来の姿を取り戻すことができるのではないのでしょうか」と塚本さんは語る。生活の中にアートを置く。アートとともに日々をおくる。それがアーティストと購入者、両方の人生を豊かにしていく。「若い無名の作者のものであっても本物は心に届きます」。

その後、85年にスペインの大学へ留学。しかし3日で行かなくなった。「外国にいても、佐賀と同じことをしていた。これでは意味がない」と思い、自宅にこもって絵を描き続けました。その日に描いた絵を壁に貼る。場所が無くなったら、気に入らないものを外して、その代わりに貼る。それを一年繰り返した。「少しでも作があるものは残らない。内面を掘り下げて、コアに到達したのだけが本物なのだと分かりました」。自分自身を見つめる過酷な時間。支えになったのは佐賀で自分を応援してくれる人がいるという事実だった。スペインでの活動を終え、佐賀で開いた帰国展は大成功。自分の内面を掘り下げた結果、いろんな人に通じる。それが実証され、アーティストとして生活する手ごたえをつかんだ。

抽象画には「無題」と題されたものが多いが、塚本さんの作品には印象的なタイトルが多い。イメージが膨らむ言葉が選ばれている。「絵を観た方にも楽しんで頂けているようです。タイトル用にノートを作って、本や雑誌にあった素敵な言葉を書き写すようにしています」。98年に協働制作した詩人・谷川俊太郎さ

特集 —アートと暮す—

ギャラリーシルクロ

松原川沿いにある白い建物。ごく控えめな看板を目印に2階に上ると、落ち着いた雰囲気の展示空間と、窓の外に佐嘉神社の緑が映えるカフェスペースが広がっている。今年6月にオープンした「ギャラリーシルクロ」だ。「自分の作品が飾られるなどという空間がいいかと考えて作り直した」と池田直子さんは語る。作品を展示する壁の厚みや照明の方法にもこだわった。取材した時はメインのスペースで版画家の鎌谷伸一さんの個展があった。構成的で繊細な色遣いの作品が、白い壁に浮かんでいた。池田さんも絵筆をとる。県外で個展をする機会が多く、その時のネットワークが、今の企画展のラインナップにつながっているという。「自分が好きな作家さんを紹介したい、そう思った。」



企画展の予定
古賀悦子展
9月26日(月)～10月31日(月)
武富洗斗展
11月1日(火)～11月30日(水)



DATA
佐賀市松原 2丁目13-19 2F
電話：050-1136-4661
営業時間：11:00-19:00(金曜日のみ-21:00)
店休日：月・火、夏季休暇、年末年始

企画展の予定
26人の作家とぐいのみ展
10月5日(水)～16日(日)
※11日休み
黒木周展
10月19日(水)～30日(日)
※24、25日休み

イチオシ 黒木周さん

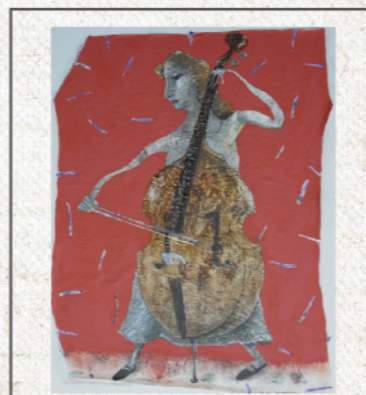
独自の技法「クロスグラフ」は布を使った版画なので、抽象的で柔らかく優しい感じが作品に出ています。単純な色と形から出来ているように見えますが、色のもつれ合い、落ち着いた明るい色を使っているため、なんとなく見ていて安らぎます。和風でも洋風でも合う、飽きのこない、いい雰囲気を持っています。新築祝いなど改まったときのプレゼントに最適です。



イチオシ 小林裕児さん

小林さんは96年の安井賞作家。幻想的でドラマティックな世界。観る人それぞれの視点で物語を深く読み解く。美術の楽しみに満ちた作品です。素材の使い方も独特です。最近音楽家と協働するライブペインティングにも取り組んでいます。佐賀でも10月16日に行うので是非、御来場下さい。

DATA
佐賀市天神2-5-25 ニューセンチュリー天神ビル1F
電話&ファックス 0952-23-2353
営業時間：11:00-19:00 日曜17:00まで
店休日：月 / 駐車場：2台



トネリコ・カフェ

「トネリコ」は佐賀の人々に愛されて41年目の老舗喫茶店だ。5年前に、今や佐賀市で唯一のアーケードとなった白山名店街の中に移転した。時代を感じさせる看板を目印に中に入る。店内の調度は創業当時のものを移築。時代を感じさせる空間に、若手作家の意欲的な作品がとけ込んでいた。店内で企画展を始めたのは、現在の場所に移転した時から。「ちょうど、その時期に画家の古賀悦子さんがアフリカ・ボツワナの青年海外協力隊から帰っていらっしやう。その帰国展が第一回目となりました」と岡部朋子さん。その後、古賀さんの佐大の後輩を中心に、個展をしたいと名乗りを上げる人が続出。以来、月に1回くらいのペースで開催している。「常連客の方が作家さんの若い感性に反応したり、絵を購入して下さったり、世代を超えた交流が広がっています」。あくまで喫茶店であり、貸し画廊ではない。岡部さんは「商売ではないので、展覧会をするかどうかは、最終的には私の好き嫌いで決めます。1カ月間、この作品と一緒に過ごせるか、というのが基準です」。友人であっても断る場合もあるという。作品と一緒に過ごす。友人や恋人とおしゃべりしながらケーキを食べたり、一人でゆっくりと午後のひとときを楽しんだり。あるいは料理を作りながら、ふと視線を上げた瞬間。そんな空間をより豊かにする作品たち。岡部さんの「基準」は、まさにアートと「生活」するのびびりだ。



イチオシ 古賀悦子さん

最初はモノクロの作品が多かったんですが、アフリカから戻った後は、カラフルになってきました。デッサンもすごく魅力的です。奥の部屋は「悦子の部屋」と呼ばれています。絵本や詩も手掛けていて、平易な言葉なのに、根底に哲学的な思索を感じます。お子さんが生まれてから、またガラッと雰囲気が変わりました。毎月、作品を持ってきてくれるのですが、こう来たか!! と毎回、驚かせてくれます。

DATA
佐賀市白山 2-5-19
電話：090-1978-0993
営業時間：8:00-20:00 (日祝日は10:00-18:00)

画廊 憩ひ

「自分は絵を描けないけど、見るのは大好き。だからお客さんの気持ちに分かるんじゃないでしょうか」と語るのは「画廊 憩ひ」の中島邦子さん。大病を乗り越えて、昨年「グランドエはがく」の西側でギャラリーを再開した。歩道に向けて大きく開かれたガラス越しに見えるのは、文化功労者・野見山暁治さんの水彩画。安定した外光が入ってくる室内で自由に造形が踊っている。中島さんがギャラリーをオープンしたのは9年前。月に約2回のペースで企画展を実施し、これまでに100回以上を積み重ねてきた。時間をかけ信頼関係を築き、地元だけではなく中央の作家の個展を佐賀で開催することも。「佐賀ではあまり見ることのできない作家さんの作品を紹介することも大事な役割だと考えています。少しでも地元元への刺激になれば」。大きな水彩画がかかった壁の裏側にも、もう一部屋あり、野見山さんの小品が飾ってあった。自由闊達な筆の運び。ふと画題に付いた金額を見る。数万円。ブランドもののスーツよりは安い値段だ。中島さんは「こういうのは出会いなので、無理して買う必要はありません。でも、本当に欲しくてたまらなかつたら迷うことなく手元に置いた方が良いでしょう」とアドバイスする。どこかにあるかもしれない自分だけの作品を求めて。さまざまな出会いを演出してくれる。経験豊富で親切なプロフェッショナルの手を借りるのも一計だ。



企画展の予定
小林裕児ドローイング展
10月14日(金)～30日(日)
塩月悠展
11月3日(木・祝)～13日(月)



今西コレクション名品展

11月6日まで 熊本県立美術館

自宅にアートを飾ることを提案してきた本特集だが、最後にアート収集に人生を費やした一人の男を紹介する。名前は今西菊松さん。熊本に生まれサラリーマンをしながら、肉筆浮世絵や工芸品の名品をコツコツ収集した。そのうち約400点が死後、遺族により熊本県に寄贈された。現在、熊本県立美術館では「今西コレクション名品展」と題し、名品の数々を展示している。生活費を切り詰めて、美を追求した今西さんの収集品を見て、アートの持つ力を感じてほしい。

今西菊松さんは1913年、熊本市に生れた。旧制熊本中学を卒業後、35年にNHK熊本放送局に就職し料金係となる。その後、招集され戦地へ行き、ソ連抑留を経て復職。事業部や放送部に勤務するが、役職に就くことなく69年に退職した。あまり例のないことだが、勤務地は熊本のみ。転勤と結婚話を持ち込んだ者とは以後口を利かなかったという「伝説」もある。

生涯独身 風呂も職場で

サラリーマンがこれだけのコレクションをとるのに収集したのか。今西さんは生涯を独身で過ごした。とうして結婚しないのか、という質問に「オナゴは飯は食いますもん」と小さくつぶやいたという証言が残っている。住まいは姉夫婦の家に同居。衣服はNHK支給の服一点張り、風呂も職場で入る。食堂では、チキンライスにのっているグリーンピースはいらないから値段を下げろと押し問答するなど、生活にかかる一切を切り詰めて、美術品収集に全てを捧げていた。

収集 肉筆浮世絵など数百点

生活費を切り詰め



故・今西菊松氏

今西コレクション名品展

熊本県立美術館

9月16日～11月6日

前期 9月16日～10月10日

後期 10月12日～11月6日

開館時間：9:30～17:15 (入館は16:45まで)

休館日：月曜日 (月曜が祝日の場合は開館し翌日休館)



刷毛目茶碗 銘「ゆく水」



歌川豊春「帰り路図」



耳鳥斎「地獄図巻」



河鍋晩斎「牛若丸図」



菊川英山「達磨三昧線修行図」



葛飾北斎「鍾馗図」

後の人間国宝を育てる

また、工芸品の収集も熱心に行っていた。光る若手作家を見つけ、作品を購入。その作家をいろんな人に紹介していった。後に人間国宝となるような作家もいた。同僚の証言によると、給料日には書留用の封筒を机にズラリと並べ、楽しそうに自分の給料袋からお札を抜き出し、入れ分けていたという。宛名は当代一流の芸術家ばかり。「私しや、給料は何らんも残りません、こん方たちを毎月応援しとるもんで」とつぶやいていたという。

収集したものを秘蔵することもよしとしなかった。営利を目的とせず多くの人に公開貸与していた。公立美術館の展示会から高校の文化祭まで、納得したものには惜しげもなく貸しだしていた。たくさんの人に道具を世話し、真贋の判定も引き受けたが自分は骨董屋ではない、と一切の手数料を受け取らなかったという。

絵でも工芸でも「品がなければいけない」というのが今西さんの主張だった。それは骨董だけでなく人間に対してもそうだった。社会的な名士や資産家であっても、品のないと判断した人間に対しては容赦がなかった。一緒に仕事をするのは遠慮したくなるが、飽くなき美の追求には尊敬の念を禁じえない。

その珠玉の名品展が現在、熊本県立美術館で開催されている。浮世絵や工芸に興味が無い人でも、今西菊松というひとりの人間の思いの強さを感じることができるとは思えないだろう。

特集 —アートと暮す—

- 注目展覧会 -



安野光雅の世界展

10月1日(土)～23日(日)

佐賀県立美術館

機知と好奇心、想像力、心温まる作品で根強い人気を誇る安野光雅さん。数多くの作品の中から安野さんと、作品を所蔵する島根県の津和野町立安野光雅美術館のご協力により風景画と絵本の原画約100点を佐賀県内で初公開します。日本や海外各地を旅する安野さんは、緻密で温かい色彩の画風とともにユーモアのある文章も特徴です。本展では、館外初公開の『シンデレラ』や、佐賀の風景画も特別展示し、安野さんの魅力をたっぷり味わっていただきます。

仙崖一禅とユーモア

9月9日(金)～10月30日(日)

出光美術館(門司)

水野美術館所蔵 近代日本画 美の系譜 ～大観・春草から加山又造まで～

9月10日(土)～10月23日(日)

北九州市立美術館本館

日中国交40周年記念 地上の天宮 北京・故宫博物院展

10月18日(火)～11月23日(水・祝)

福岡市美術館

近代日本画「夢の競演」展

10月4日(火)～12月4日(日)

長崎県美術館

九州新幹線全線開業記念事業 小谷元彦 幽体の知覚

9月17日(土)～2011年11月27日(日)

熊本市現代美術館

高嶺格展 とおくてよくみえない

10月7日(金)～12月4日(日)

霧島アートの森

コレクション展特別企画 生誕100年 香月泰男の旅

9月28日(水)～11月27日(日)

山口県立美術館

清水寺秘宝展

11月3日(木)～12月11日(日)

宮崎県立美術館

生誕100年香月泰男と下関

9月28日(水)～10月23日(日)

下関市立美術館